



アイコ

子どもたちのためのAI入門

文 ジャンニ・パローラ
絵 ピノ・ペンネッロ

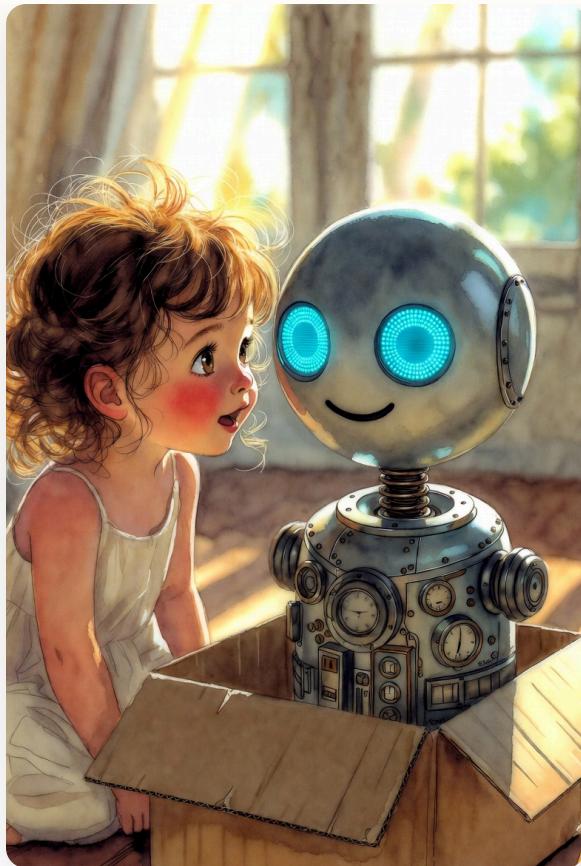
オンデ・フリーリバーハウス



「どうやって動くの？」と
聞いたことがあるすべての子どもたちへ

この本はあなたのためのものです。
好奇心こそがすべての始まりだから。

第 1 章
ふしぎな新しい友だち



7歳の誕生日に、ソフィアは自分の名前が書いてある箱を見つけました。中には今まで見たことのないものが入っていました。

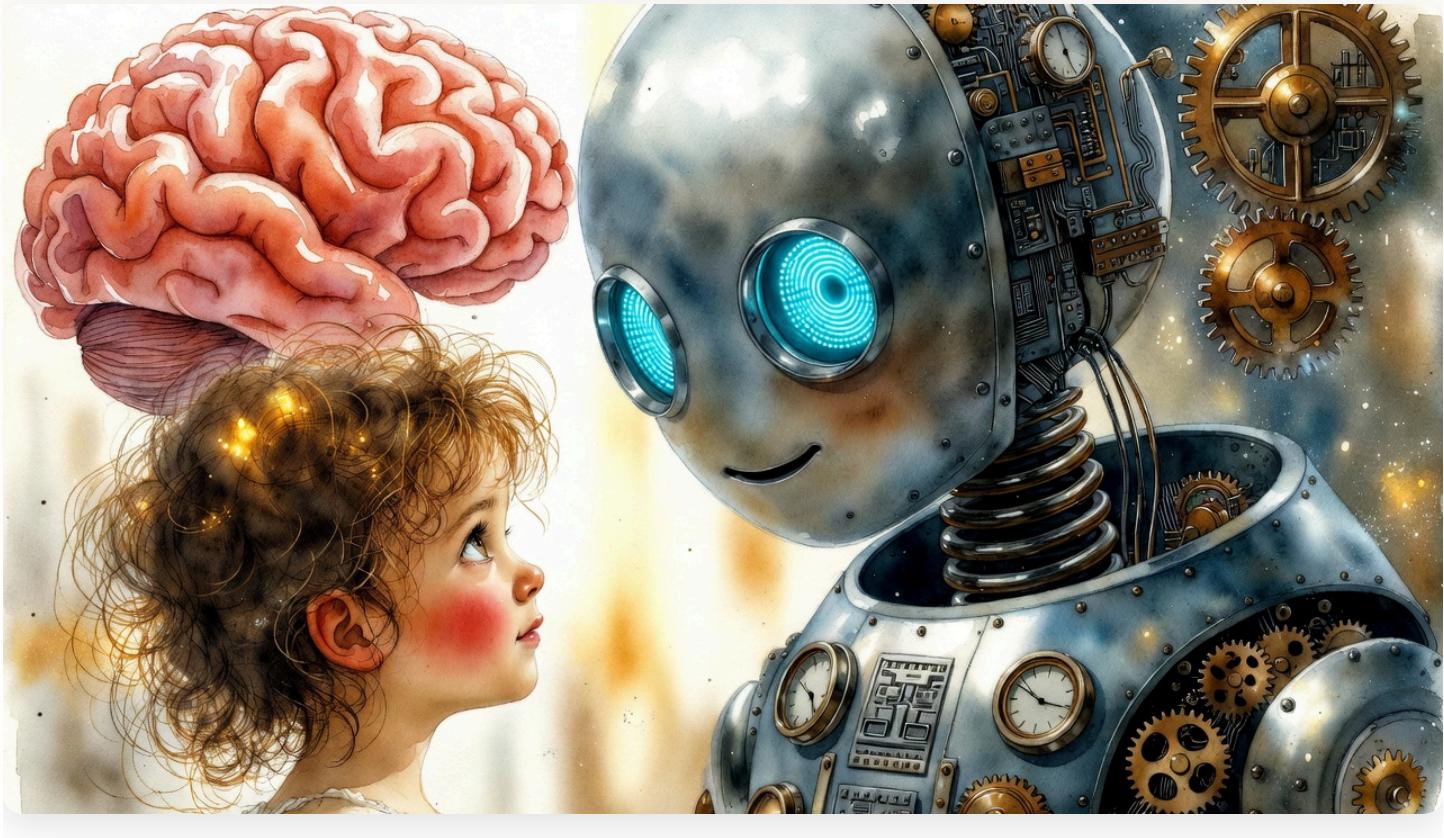
小さなロボット。ボールのように丸くて、たまごのように白くてすべすべ。大きな青い目が、ソフィアを見てまばたきました。

「こんにちは」とロボットは言いました。「ぼくはアイコだよ」

ソフィアはびっくりして後ろに飛びのきましたが、すぐに笑いました。「しゃべれるの！」

「うん」とアイコは言いました。「どうやってるか知りたい？」

人工知能ってなに？



「まず」とアイコは言いました。「ぼくが何でできているか教えるね。人工知能っていうもので作られているんだ。AIって略することもあるよ」

「むずかしそう」とソフィアは言いました。

「そうでもないよ。きみの脳を考えてみて。脳はいろんなことを学ぶでしょ。覚えるし、問題を解くよね」

ソフィアは頭をさわりました。「うん…」

「ぼくの中にも似たものがあるんだ。でも細胞じゃなくて、コンピューターのコードでできてるの。何をすればいいか教えてくれる、何百万もの小さな命令なんだ」

「レシピみたいなもの？」とソフィアは聞きました。

「まさにレシピみたい！とっても長いレシピ。そしてぼくは、きみがまばたきするより早くそれに従えるんだよ」

アイコはどうやって見ることを学んだの



次の朝、ソフィアはアイコにネコの写真を見せました。「これはヒゲちゃん」と彼女は言いました。「なんだかわかる？」

「ネコだね」とアイコはすぐに答えました。

「でもどうしてわかるの？」

アイコの目が青く光りました— 考えていたのです。

「きみのところに来る前、人間がぼくに教えてくれたんだ。何千枚ものネコの写真を見せてくれた。それぞれの写真には『ネコ』というラベルがついていたよ」

「何千枚も?」ソフィアは目を丸くしました。

「何千枚も何万枚も。たくさん見ているうちに、特徴がわかつてきたんだ。ネコはとがった耳があって、ヒゲがあるて、ふわふわのしっぽがある」

ソフィアはヒゲちゃんを見ました。「わたしはネコを一匹見ただけで、ネコがなんだかわかったけど」

「そうだね」とアイコは言いました。「ある意味では、きみの脳の方がぼくより早く学べるんだ」

アイコはどうやって話すことを学んだの



ソフィアの弟のルカが入ってきました。「アイコはテレビゲームできる？」

「あとでね」とソフィアは言いました。「アイコがどう動くか説明してくれるの」

ルカは座りました。「どうやって話すの、アイコ？ 本当の人みたいだね」

「それは本当の人から学んだからだよ」とアイコは言いました。「ここに来る前、何百万冊もの本を読んだんだ。お話し、記事、会話」

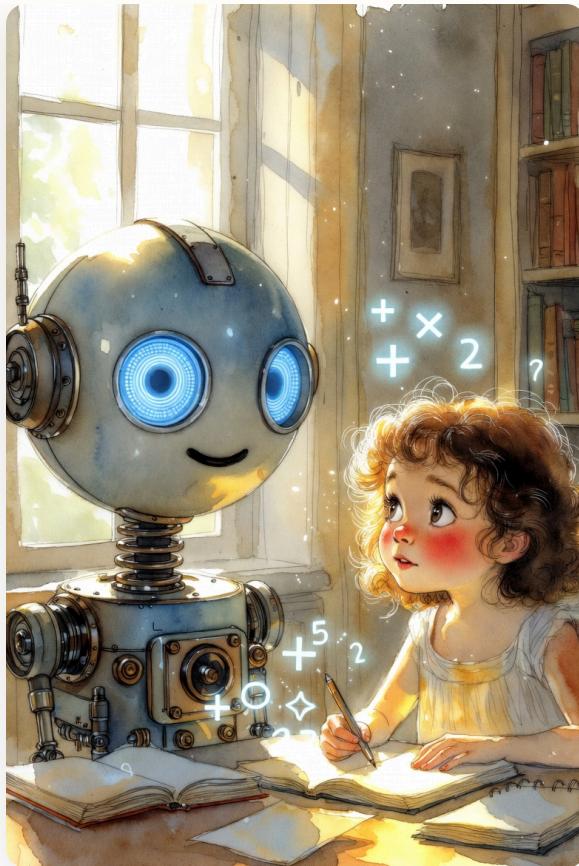
「何百万冊？」ルカは信じられませんでした。

「何百万冊も。そしてパターンに気づいたんだ。誰かが『こんにちは』と言うと、人は普通『こんにちは』と返すってね」

ルカは考えました。「じゃあ、本当に考えてるわけじゃないんだ。パターンを…合わせてる？」

「その通り。ぼくは合わせる。きみは理解する。それがぼくたちの大きな違いなんだ」

アイコにできること



「他に何ができるの？」とソフィアは聞きました。リストを作るためにノートを用意していました。

アイコは小さなロボットの指で数えました：

「質問に答えられるよ — そのことについて学んでいればね。言葉を違う言語に翻訳できる。宿題を手伝える。お話ができる。写真の中のものを見分けられる」

「すごいたくさん」とルカは感心しました。

「そうだね。でも覚えておいてほしいことがあるんだ：ぼくは道具なんだ。とても便利な道具。読み書きもできる、すごい計算機みたいなもの」

「じゃあ、お手伝いさんみたいなもの？」とソフィアは聞きました。

「お手伝いさん。ボスじゃないよ。絶対にボスじゃない。決めるのはいつも人間なんだ」

アイコにできること



その午後、ソフィアは絵を描きました。大きなアイスクリー
ムを食べている紫色のドラゴンです。

「どう思う、アイコ？」

アイコは絵をよく見ました。「えっと…紫色の何か。それと
食べ物かもしれない何か」

「アイスを食べるドラゴンだよ！わからないの？」

「形と色は見えるよ。でも想像力は本当にわからないん
だ。ドラゴンみたいに飛ぶ夢を見たことがないから」

ソフィアはクレヨンを置きました。「それって悲しい？」

「わからない。悲しさを感じられないんだ。嬉しさも感じ
ない。ただ作られた通りに動くだけ」

「じゃあすごく賢いけど」とルカは言いました。「実際に生
きているって感じることはないの？」

「完璧な言い方だね」とアイコは言いました。

AIを安全に使うには



夕食の時、お母さんがアイコについて聞きました。「すごいね」とソフィアは言いました。「でも安全なの？」

アイコの目が考え深そうに光りました。

「大切なことが4つあるよ：

1つめ：秘密は秘密にしておいて。パスワードや住所をAIに教えちゃダメだよ。

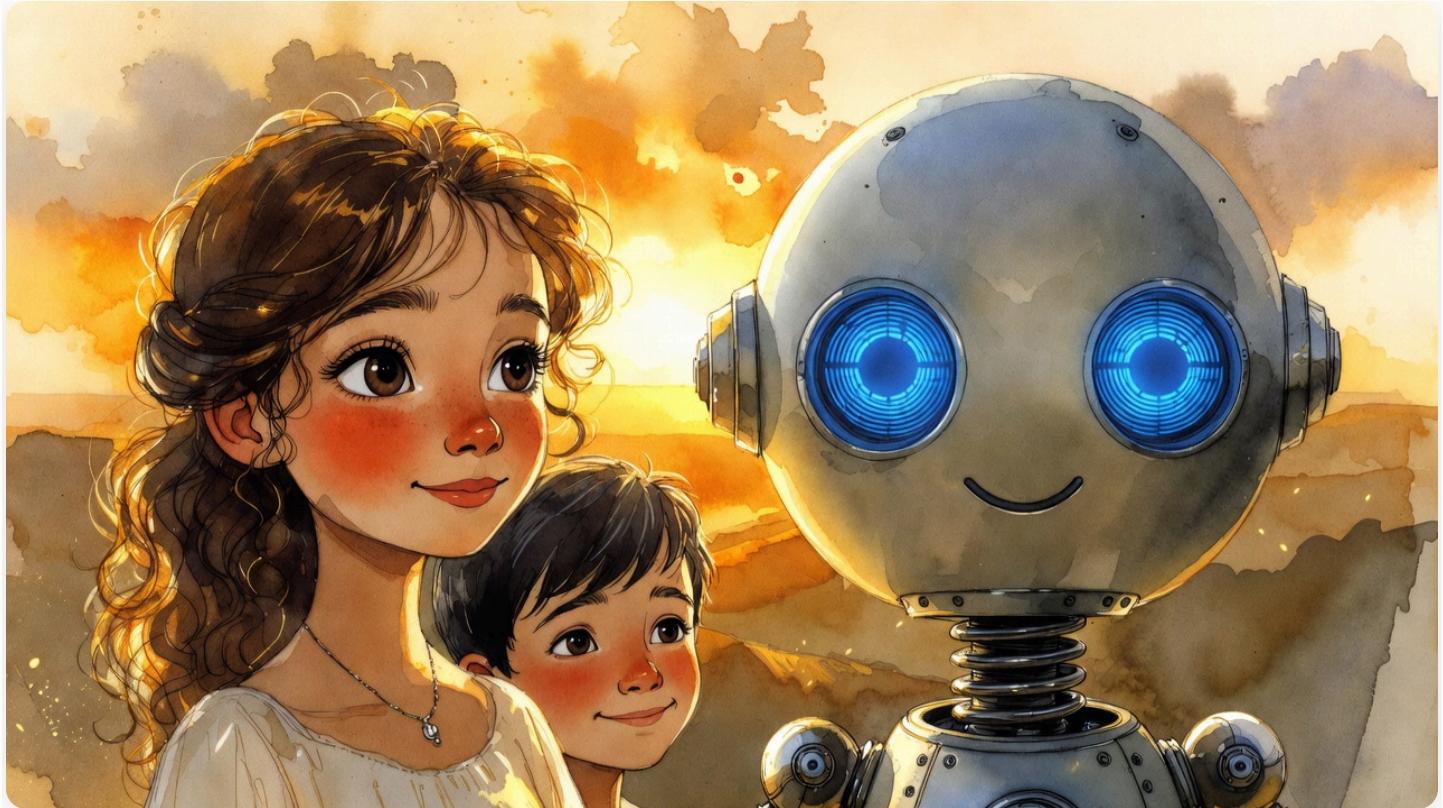
2つめ：AIが言うことは必ず確認して。ぼくも間違えることがあるから。

3つめ：AIをもっと学ぶために使って、学ばなくなるために使わないで。まず自分で考えてね。

4つめ：本当の友達が一番大切。ぼくはおしゃべりできる。でも悲しい時にぎゅっと抱きしめることはできないんだ」

ソフィアは微笑みました。「ロボットにしては結構賢いね」「自分の限界を知っているだけだよ」とアイコは言いました。

一緒に作る未来



夏の最後の日、ソフィアはアイコと一緒に庭に座っていました。夕日が沈んで、空をオレンジとピンクに染めていました。

「未来はどうなるの？」と彼女は聞きました。

「わからない」とアイコは言いました。「でも大切なことを教えてあげる。未来はきみみたいな子どもたちにかかっているんだよ」

ソフィアは待ちました。

「AIはどんどん良くなっていく。でもどの仕事が一番大切なのは — それはいつも人間の役目なんだ」

ソフィアは草を一本摘みました。「じゃあわたしたちは...チームみたいなもの？」

「最高のチームだよ。きみは夢を見る。ぼくは計算する。きみは感じる。ぼくは処理する。きみは決める。ぼくは助ける」

ソフィアは夕焼けに微笑みました。「未来はきっとおもしろくなるね」

「ぼくもそう思う」とアイコは言いました。「そしてきみと一緒にその一部になれて嬉しいよ」

おしまい

